

鈴木 伸太郎

現実解釈が解きほぐされる多様な機会について

1 再びクローズアップされた自由の問題

新型コロナウイルスの流行という事態によって、市民的自由の問題は再び脚光を浴びつつある。市民の自由を制限して、都市封鎖や行動の追跡をする方が社会を守れるという考え方が一部で台頭してしまったのは、残念なことであった。近代社会の自由の危うさ、ともすれば全体主義へと傾斜してしまいかねないという懸念について、ナチスから逃れたエーリッヒ・フロムが『自由からの逃走』を書いてから、まもなく80年が経とうとしているが、私たちはこのテーマの呪縛からまだ逃れられていない。

自由の代償として、個人の拠って立つ精神的な基盤が脆弱化してしまった。そのため自由はともすると人々の重荷になる。「積極的自由」を実現できない個人が増えていけば、近代社会は、全体主義に向かってしまう。これが『自由からの逃走』の

主題である。

社会の桎梏から自由になるというような「消極的自由」だけでは十分ではなく、獲得した自由が個人個人の自己実現をかなえていくような積極的自由を実現できなければ、人は自分の力で人生を切り拓く自信が持てないまま無力感に陥ってしまう。それが、(例えば典型的には)権威主義的な社会的性格を生み出し、ナチズムのような全体主義をもたらす。言い換えるなら、全体主義とは、消極的自由だけは獲得した個人の無力感が、濃厚に寄り集まって形成されたものである。

この図式をそのまま受け入れると、私たちの日々の営みが、非常に責任を帯びたものに変貌してしまう。なぜなら、私たちひとりひとりが、積極的自由を日々実現できなければ、それだけ無力感の集積が増大することになるに違いなく、その集積が一定レベルを超えれば、それが全体主義につながるという図式だからである。社会においてそのような集積がなされる

のを防ぐためには、私たち個人個人が毎日、毎時、積極的自由の実現のために努力しなければならぬことになりはしないか。

しかし『自由からの逃走』の読者は、積極的な自由については、「〜からの自由」という消極的な自由でないもの、とどこか曖昧なイメージを受け取るに過ぎない。積極的な自由が困難なものであれば、それだけこの日々の責任を果たすのが困難になるだろう。一握りの人間しかそれは実現できないのかもしれない。だとすれば、自由を実現した近代社会は、かなり危うい基盤の上に立っていることになる。自由が重荷になり、自由を心の底から歓迎しない人々が増加することが全体主義に向かう道であるということであれば、私たちは少しも油断できないという気持ちにさせられてしまう。

近代社会のもたらした自由は、間違いなく、社会に生きる個人個人に、近代以前では考えられなかった重荷を負わせている。私たちには身分も家柄もないし、都会人の多くにとっては故郷と言えぬものもない。社会のルールを破ることで他者に被害や損害を与えたりしない限り、何をしても自由なのだとしたら、私たちの現在の状態（社会のどのようなポジションを占め、どのように生活をいとなんでいるかという在り方）を正当化するものは、私たちがとった行動、私たちの行った選択であり、それが、どのような他者による評価に晒されたかということだけなのである。

そもそもどんな社会であれ、人間同士が密接に関わり合いながら社会生活をしている以上、好き勝手に何でもできたりはしない。人間の平等、法の下での同等の権利ということを原則に掲げれば、なおのことである。自分の振る舞いに対する否定的な評価もまた他の自由な人たちによって容赦なく行われることを意味しているからである。

つまり、私たちの行動が（私たちと同等の権利を持つ）他者に影響を与え、それが私たちに何らかの形で返ってくるようになる。好き勝手なことを何でもすることは、そもそも無理なこととは明白である。例えば表現の自由、思想信条の自由の問題を考えてみる。近代以降の社会で、誰もがルール上は何を言うのも自由であるとされていたとしても、もちろん好き勝手に発言ができたりはしない。その発言は他者からの反応を呼び覚ましてしまうので、その影響を被ることは免れない。その発言が、反発される場合はもちろん、聞いた人によってバカな発言だとみなされたり、無知な発言、配慮のない不適切な発言、無責任な発言、等々とみなされたりすれば、発言者は、少なくとも潜在的に、不快な状況や不利な状況に置かれることになる。

「何を言っても、その発言の結果の責任を問われないことが本当の自由ではないか」とすら感じる人もあるだろう。しかし、発言に責任を取らなくていいのは、幼児を別にすれば、他の人よりも特別に優越した権力のある人間に限られる。それも、他

の人の評価によって権力を奪われたりしない人間に限られるのである。現代の権力者の代表は政治家であるが、これは選挙の洗礼を経なければ権力を維持できないのであるから、政治家こそ発言に責任を取らされる可能性を常に念頭に置かないといけない職業なのである。政治家にその発言の責任を取らせることができればそれだけ、民主主義的であり、正義であるとわれわれは考えてしまうし、その考えを撤回することは不可能である。組織の代表、例えば会社の社長のような立場の人間にも、他の取締役や投資家など、他人の評価が反映されるようにすることが、ガバナンスの要諦、つまりは社会正義に叶うものと私たちは考えざるを得ない。つまり、社会正義の理想の行き着く果ては、発言に責任を持たされる人間ばかりが権力の座につく世の中であろう。現実には理想に遠いとしても、現代では誰もが自分の発言に気をつけなければならないことは間違いない。

以上の議論は、ただ否定的な側面からのみ書いてみている。本来、私たちは、言葉を発する以上は、他人のそれに対する反応を期待している。他人の反応がないところに言葉を発しても、虚しさを覚えるだけであろう。そして、厄介なことに、私たちは他人の自由な反応をこそ求めている。権力に溺れた人間によくあるように、他人が自分の機嫌をとってくれればばかりを期待しているとしたら、どこか精神的なバランスを崩していると言えるだろう。話をする前から完全に好意的な反応が予想さ

れるような状況は、他の人間の内心に触れないまま、形だけのやりとりとなり、他の人間と関わるという現実感が薄くなることを意味している。虚しいという点では反応なしの場合とあまり変わらない。

したがって、好き勝手に何でも話す自由をわれわれが求めていると考えるのは、そもそも間違っていると考えるだろう。自分の自由も他人の自由も尊重するとしたら、(時に辛いとしても)自分の発言に対する他人の評価を受け止めるようにする以外にはない。

2 個人と社会を巡る逆説

こうして、私たちは、他人が私たちに對して下す評価が私たちに時に否定的な影響を及ぼすという主題に巻き込まれることになる。コミュニケーションを介して自分と他人の相克が起こるといふ図式は、それ自体は間違いないことだと言えるが、現代社会における個人の脆弱な精神的な背景を考える際には、他人との相克の図式だけでは不十分だと考えられる。なぜなら、もしそれだけであるなら、個人の精神の安定のためには、他人の評価が私たちに負の影響を及ぼさないようにすることのみが重要ということになってしまいうからである。それでは「承認欲求」というものが私たちを支配するという図式

から逃れられず、私たちは承認欲求に振り回されて生きる他はなくなる。承認欲求にのみ従うとすれば、他人に嫌われないことが最重要課題になるほかはない。なるほどそれは現代人の行動の一面を的確に描き出しているとは言えるだろう。しかし、承認欲求を満たすことを求めて他人に受け入れられることのみを行動原理としていては、私たちは自由とは言えない。そして、私たちは自由であるためには「嫌われる勇氣」を持たなくてはならない、という主題にそれはつながっていく⁽¹⁾。

問題は、私たちが持たなくてはならないのは、本当に、他人に嫌われる「勇氣」なのだろうかということなのである。承認欲求に振り回されて生きるのは、自由な生き方とは言えないということとは間違いない。しかし、言葉尻を捉えて論ずるわけではないが、「場合によっては他人に嫌われても構わない」という「勇氣」が出るとしたら、それは何によって支えられているのかということこそが真の問題なのである。承認欲求に負けてしまう場合と、抵抗できる場合を分かつ要因は何か。それを問題にすべきではないのだろうか。

「嫌われる勇氣」というテーマは、フロムの「積極的な自由」というテーマと似たところがある。どちらも、自信に満ちた、しっかりと自立した個人の存在を前提にしているように見える。そればかりでなく、「嫌われる勇氣」のためには自立した個人でなくてはならず、そのためには「嫌われる勇氣が必要」……と

いうように同じところをグルグルと堂々巡りしてしまいそうでもある。

自信と確信に満ちた、確呼とした強靱な個人の存在はどのようにして可能となるのであろうか？ 個人を個人とのみ捉えていては、永遠に答えられないように思う。すぐ後で見ないように、逆説的にも、個人は共同体に支えられてこそ強靱となる。もちろん、だからといって、共同体と同化したり一体化したりして、個人の存在と共同体との区別がつかなくなるようなことになつてしまうと、「個人の自由」とは言えなくなる。

エマニエル・トッドが述べているように、強力な個人の存在は、社会のあり方と無関係には考えられない⁽²⁾。近代社会で言うなら、「国民」の存在が重要だということになるだろう。トッドの著書『経済幻想』は、現在のようなナシヨナリズムを否定してグローバリズムを礼賛しがちな風潮を批判して書かれたものであるが、個人としての自信や気概は、社会に対する信頼、社会の一員としての自分を感じることと切り離せないということが核心的な問題であると主張する⁽³⁾。

私は、ことさら「国民」の重要性をここで論じたいというのではないが、しばらくこの議論の筋道をたどってみよう。なぜ「国民」が重要なのか。それは、言語や伝統を共有する均質なコミュニティとしてイメージされるからである⁽⁴⁾。国民の一員であるということは、ある程度まで、周囲の他の人間が考

えることや、物事に対する反応というものを共有できると感じることなのである。つまり、自分の内部に感じる思考や、欲求や衝動というものが、ただ自分だけのものではないと感じるということである。すべてが自分固有のものであれば、他人に否定されたら尻込みしてしまうかもしれないが、「自分のような人間も世の中にはいるのだ」と感じれば、それだけ、偶発的な否定には屈しにくくなるに違いない。

私たちが過去や現在の強力な思想にかぶれた場合を考えても、これは首肯できるのではないか。「このように考えるのは決して自分だけではない」と理解するだけで、他人の否定にもひるまずにいられるようになるものである。知識人の強さというものがあるとすれば、本来こういうものである。過去の世界にたくさん共感できる思想家がいればそれだけ、多くの事柄に対して自信を持って判断ができるようになるだろう。自分の誤りを認める度量も、それに比例していると言えまいか。誤りを指摘した人の考え方が、自分の中に共鳴者を見い出せば、それだけ自分もその考えを認めやすくなるだろう。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というような言葉も、この文脈で首肯できる。歴史に生きた人々を理解することが深いほど、判断に確信を持ちやすく、間違いの訂正もしやすくなるに違いない。「国民」が重要であるのは、誰もが「歴史に学ぶ」ような広々とした精神の持ち主とはなかなかないということに関

連していると思われる。理論的にはわれわれはコスモポリタンになることができるのかもしれないが、現実にならぬ人が少数であるとすれば（森鷗外が「東西両洋の文化を、一本つづの足で踏まえて立っている」ような、「二本足の学者」を要求すると書いたように^⑤）、「東西両洋」だけでも大変なことであり、現代世界の多数の学者や知識人がそのような理想に達しようと努力しているということもなさそうである）、大多数の人間にとつて、難しいことをせずとも身に備わっている伝統や文化が、確実な手がかりになってくれるのである。グローバル・エリートを気取る人もたくさんいるが、その割には、個人個人の精神において、理想が現実を追いついていない。コスモポリタンとしての教養が可能になる人はあまり多くない中で、無理にグローバルな規模の社会を作っていくとしたら、主流になる社会（例えばアメリカ社会、等々）の拡大版になるかする他はないのではないか。主流でない社会の出身者は、肩身が狭いだろうし、主流とされる社会の出身者もまた、どこか伝統的な社会とは違うことに戸惑うに違いない。誰もが無理やり広場の群衆の中に連れてこられたような違和感と孤独感を抱くことになりかねない。

グローバル化する社会において疎外されがちな個人の不安という点で、ギデンズの「再帰的モニタリング」という捉え方もここで想起される。ギデンズによれば、科学的な知識は、絶え

ず刷新されるところに特徴があり、科学技術に対する信頼で成り立っている現代社会にとって、そのような継続的な知識の刷新は、個人の精神の安定的な基盤を掘り崩すように作用する⁽⁶⁾。まさに新型コロナウイルスの騒動に否応なく巻き込まれたしまったわれわれが実感させられていることではないだろうか。例えばマスクに効果がないと言われたり、ある程度効果があると言われたり、ロックダウンが必要と言われたり、害のほうが大きいと言われたりするような、あてどなく揺れ動く専門家の見解に私たちは翻弄される。専門家の唱える「新常态」を絶えず追いつけながら疲弊していく人がいる一方で、恐怖に駆られたまま思考停止に陥るように見える人もいる。そのような意識の混乱状態が、さらにウイルスへの対応を難しくする⁽⁷⁾。

しかしながら、社会生活や個人生活は、このような外的な脅威への対処や、安全な生活、便利な生活の追求というものだけで成り立っているわけではない。安全性や利便性の追求こそ、科学技術の領分であろうし、伝染病や自然災害などの危機的な状況でこそそれは前面に迫り出してくるが、それが全てではない。ある程度の安全性、ある程度の利便性が確保された中で、どのように暮らしていくか、どのように社会的課題を解決したり、個人が自己実現をしていったらいいのか、という課題が根本にあり、いったん危機の時期が去れば、そのような本来的

な課題こそが重要になるはずである。

現代社会は、安全で健康的で快適な生活の前提となる知識が絶えず見直される忙しなさを抱えており、信頼できる知識や専門家を間違えると大変なことになるような社会でもある。健康ブームに乗って次々と繰り出される怪しい健康情報に惑わされてしまうような事例にも事欠かない。そうではあっても、個人個人の精神的な基盤が根底から問題になるような事態とは異なっているし、承認欲求に振り回される個人の問題は、直接そこから来ているわけではない。

3 「人生」に期待し、指図するという問題

デュルケームが「アノミー的自殺」という概念を創り出しながら考察したのは、欲望に適切な限界を設けてくれるはずの社会の力が頼りなくなってしまうという事実であった。伝統や宗教という、悪く捉えれば因習的な、しかしながら欲望を抑制してくれる存在としては相当に堅固であったものが影響力を失ってくるにつれて、個人個人の欲望の規制が緩くなりすぎるという問題が生じる。経済活動に重点が置かれることが、さらにこの傾向に拍車をかける。現代の社会においても、私たちはこの点では社会の規制力にかなり依存している。経済的自立を求められていない大学生の消費生活は、社会の平均からすれば、

慎ましいものであるし、彼らが高級車を乗り回したりすることを抑制されて苦しんでいる様子はない。年功制の強い日本においては、大半の勤労者は、自分の年齢を考えながら、消費の水準を納得していると思われる。大金持ちの生活に憧れて、苦しい欲望に苛まれる人間は、多数ではないだろう。これらは社会の規制力の作用と考えられる。ただ、それは、牢固としたものではないし、経済変動にさらされれば混乱していく可能性もあり、危機の時代には個人を捉える力はさほど強くはない。新型コロナウイルスのような突然の危機によって、例えば失業に見舞われた人間にとっては、生活の基盤が崩れ、社会生活の中に自分が位置づく感覚が減退し、生活水準を切り詰める惨めさも味わうかもしれない。少し以前まで当然と考えていた現実が突然崩壊するときに、現代人は精神的な危機を迎えやすい。以前の現実結びついた欲望が以前のままであるのに、現在の現実はその欲望を到底満たしてはくれない。そのギャップが、その人間の住まっていた安定的な世界を崩壊させてしまうのである。

現代社会に生きる人間にとって、社会の規制力に頼るだけの生活は、精神的な意味で危険なのである。自分にはまったく責任のない外部的要因によって社会が変動に見舞われ、自分の生活の中で当然としていた土台が崩れていくということは、経済面に重心を置いた社会保障だけでは解決しない問題なのである。

キデنزが想定した再帰的モニタリングのもたらす不安とは異なった意味において、現代社会に生きる個人は不安定化の危険に絶えずさらされている。例えてみれば、スキーでどこぼこの斜面を滑っていく際に大切な膝の柔らかさのようなものが必要なのである。ゲレンデが滑らかな斜面でなくとも、斜面の変動に追従していく柔軟さが大切な要素である。斜面がどこぼこしているのは、社会変動の要因もあるが、個人的な期待と現実とのギャップも含んでいる。スポーツチームでスタメンを約束されていたと思っていた自分が、試合直前に突然スタメンから外されたりした場合のショックの程度は、自分がどの程度スタメンを当然視していたかに拠るのである。受験、就職、恋愛、結婚、仕事上の成功や地位など、様々な場面で、私たちは勝手に期待し、それがかなわずに勝手に絶望したりしてしまうような生活を送っている。これは、現代風な生活様式から直接派生している、すぐれて現代社会風な問題なのである。

単に国民の一員であるという意識だけでは、この困難は乗り切れないと思われる。集団的に共有される現実があったとしても、個人個人の現実にとって、期待とのギャップが生じたときに、どのようにそれに対処するのか、耐えていくのかということが問題なのである。

ナチスの強制収容所に入れられ、そこを生き延びたフランクルの厳しい認識を読んでみると、私たちの生活意識というもの

が逆に浮かび上がってくる。

強制収容所における人間を内的に緊張せしめようとするには、まず未来のある目的に向かって緊張せしめることを前提とするのである。囚人に対するあらゆる心理治療的あるいは精神衛生的努力が従うべき標語としては、おそらくニーチェの「何故生きるかを知っている者は、ほとんどあらゆる如何に生きるか、に耐えるのだ。」という言葉がもっとも適切であろう。すなわち囚人が現在の生活の恐ろしい「如何に」（状態）に、つまり収容所生活のすさまじさに、内的に抵抗し身を維持するためには囚人にその生きるための「何故」を、すなわち生活目的を意識せしめねばならないのである。

反対に何の生活目標をもはや眼前に見ず、何の生活内容も持たず、その生活において何の目的も認めない人は哀れである。彼の存在の意味は彼から消えてしまうのである。そして同時にがんばり通すならの意義もなくなってしまうのである。このようにして全く抛り所を失った人々はやがて仆れていくのである。あらゆる励ましの言葉に反対し、あらゆる慰めを拒絶する彼らの典型的な口のききかたは、普通次のようであった。「私はもはや人生から期待すべき何物も持っていないのだ。」これに対して人は如何に答え

るべきであろうか。

ここで必要なのは人生の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならぬのである。哲学的に誇張して言えば、ここではコペルニクスの転回が問題なのであると言えよう。すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身に問われた者として体験されるのである。人生はわれわれに毎日毎時問いを提出し、われわれはその問いに、詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならぬのである。人生というのは結局、人生の意味に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである(8)。

私たちが人生から何物かを期待するのではなく、人生が私たちに何を期待するのが問題であり、私たちは人生の期待に應える責任があるというフランクルの認識は、極限的な状況に置かれた人間にとっての確かな道しるべと思われるのであるが、私たちの日常意識からすれば、むやみに厳しすぎると感じられ

るはずである。私たちはそれだけたくさんの方のことを人生から期待している。言い換えると、私たちはそれだけ人生に指図しようとしているのである。もちろん、病気に罹ったときには病気の治療や療養する他はないという一事だけを考えても、私たちが人生に指図などをしようとしても無駄であることが分かるはずである。病気の時には病気に耐えていく以外の選択肢はない。病気を指図してくる「人生」に文句を付けても無駄である。私たちの思い通りに行かないことの一部は、自分の努力で何とか変えられることかもしれないが、多くは自分の力ではどうにもできないことである。病気に罹らない注意は、ある程度までできるに過ぎない。病気に罹るリスクを冒すことなしには、仕事や楽しみなど、人生の他の事柄は達成できないだろう。受験勉強や、恋愛や、仕事の成功も、運に任せる部分が相当にあるのが普通であろう。

豊かな現代社会に生きるといことは、自然に高まってしまふ人生への期待と現実とのギャップに適切に対処することの連続である。この部分のコントロールに失敗することは、私たちが容易に絶望に導くことになる。私たちは自然な自己中心的な傾向を持っている。自然な傾向に任せるだけでは、現実から乖離した独善的な期待を抱くことになるだろうし、そのような期待は高い確率で裏切られてしまうことになる。私たちに、そのような独善的な傾向に対抗するような手段を講じなければ

ならないということである。他の人たちの現実の解釈に触れることがどうしても必要となるはずである。ただしそれは、自分を差し置いて他を優先するということではない。それでは自由とは言えなくなってしまう。現代社会においてコミュニケーションが重要になるひとつの理由はそれである。

4 コミュニケーションと現実解釈の変容

自殺希少地域を実際に歩いて回った精神科医のフィールドワークは、それゆえに貴重な洞察をもたらしてくれる。そのような地域に共通した特徴は、普段はあまり他人に干渉しないコミュニケーションの状態でいながら、助けが必要な人の事情を察するのに鋭く、一方的なまでに、とことん関わろうとする姿勢を示す人が多数であるということである。

ヒッチハイクをして車で送ってくれたひとのうちのひとりの会話が、私の印象に強く残った。

「この地域のひとは、困っているひとを放っておけないかもしれないね」

私たちはヒッチハイクに応じてくれた男性の次の言葉を待った。

「困っているひとがいたら、できることはするかな」

と言った。私はそこで、できないことだったら？と聞いた。男性は少し間を置いて、

「ほかのひとに相談するかな」と言った。

「できることは助ける。できないことは相談する」

こうありさえできれば、困ったことがあつたひとは孤立しないと感じた⁽⁹⁾。

都会的な社会環境では、他人に干渉しない姿勢というのは、比較的保たれていることが多いように感じられる。そのような中で自然に私たちに不足しがちなのは、他人と関わる経験そのものである。伝統的なコミュニティーを想起するときにイメージしがちなように、他人の領分に土足で踏み込んでいくような干渉は避けていくべきだが、他人の状況をいち早く察知して、支援を惜しまないような態度は、そもそも他人の生活や他人の考え方に関心を抱くことがなければ育まれない。関心を持った上で、他人と深く関わる経験を重ねないといけないだろう。

他人と関わり、他人の話を聞くとときに、どのようなことが起こるのだろうか。現代社会の隘路は、他人の話を「内容」として、「情報」として捉えるような見解をどのように乗り越えていくかということであるように思われる。確かに内容があり、情報があつたりするのであるが、他人とのコミュニケーション

が、私たちの現実の見方に修正を迫るといことがいまの話の中では肝心な点である。単なるコンテンツ、単なるインフォメーションでは、現実の見方を修正する作用は弱いと言わざるを得ない。

気分転換にお気に入りの音楽を聴くという人は多いが、それによつて気分が変わり、少しばかり憂鬱な仕事の悩みを一時的に忘れることができたとなると、それは音楽の情報によつて変わったのではない。音楽は言語ではないということは別としても、「お気に入り」の音楽であれば、新たな情報も新たな内容も特にはないはずである。音楽に乗つて現実を眺め直したときに、少し前とは現実が違って見えるようになるという作用は、どのようなにして生じたのであろうか？ 私たちが他人と関わり、他人の話を熱心に聞こうとするときに起こることは、このような音楽の作用を念頭に置いて考えてみなくてはならないと思われるのである。音楽も、言ってみれば、作曲家や演奏家の話を聞くようなものではないだろうか。

ヴァン・デン・ベルクが描いているような、友人同士の会話の様子を考えてみるといいだろう。

友人と私が話し合っている。この話し合いは、何かの主題についての話し合いである。話題なしで話すことは不可能である。たとえばわれわれはアイスランドのことを話し

ている。ふたりとも行ったことはないのだが、本の上で知っている。…(中略)…

友人がこの国について話すとき、私は彼の言う事物のなかに入ろうと努力する。われわれの意見がいかに不正確であれ、とにかく私はアイスランドに身を置こうとする。私の方が話す番のときには、友人が私とともにアイスランドに身を置こうとするのだ。この一緒にいるということこそが友情なのである。もし私が誰かに、より共感的でないような話し方をしていたら、たとえ全く同じ言葉で話したとしても、一緒にアイスランドにいることにはならなかっただろうから。また、そうだとすれば、友人の言葉もわれわれと一緒にアイスランドにいるようにはしないだろう。その場合には…(中略)…共通の基盤をつくることへの反発感さえあつたかもしれない⁽¹⁰⁾。

そもそも共通の話題が見出されること自体が、互いを信頼し、尊重した上でなければ実現しにくい事柄である。共通の話題の傍らにともないられることこそが友情である、ということも言えるだろう。「私たちの認識がいかに不正確であれ、私たちはアイスランドを目の当たりにする」。私たちが親しく話をするということは、共同で世界を作り上げることである。どちらかが脱退してしまうと、共同の世界は消滅し、話は続かなくなっ

てしまう。そして、友人の暖かい眼差しが私たちを自由にする。自由に語り、そして自由に見るといふ体験、私たちが私たち自身になっているという体験、私たちが「私たちの身体の中にある」といふ体験をもたらす。肩が凝ったり、身体がこわばったりしないことが、親しい者同士の会話の特徴である。

私は、アイスランドについて話している。たぶん、心のなかにまざまざと描くほどに、それを言葉で呼び起こしている——まだ行ったことはないのだけれど。…(中略)…私の言葉によつて到達し、ありありと心に浮かぶこのアイスランドは、われわれの所有、すなわち、友人と私の所有である。私がそんなにもらくらくと話し、それほどにも多くをことを見るのはそのためである。友人が私の言葉を聞いているからなのだ。私は何の抵抗もなく、このアイスランドへと入っていく。…(中略)…(私と対象との間の)障壁の撤去こそが、(彼と私との)友情なのである。同時に、私は彼が私を見ているのを知っている。私が身振りをし、話し、見るのを彼は見ている。私は自由からだを動かしている。私は腕、私の手、私の喉や口、それに眼のよどみない流れに身を委ねる。(私は私のからだのなかにいる。)私はこのからだそのものなのだ——それは、私が友人と親しい間柄にあるということなのである⁽¹¹⁾。

このくだりを読むと、フロムの言う「積極的自由」というのも、あながち遠い目標ではないという印象が生まれてくる。私たちは、本当に信頼する、本当に親しい人間さえ傍らにいてくれれば、自由を体験できる。生き生きとした、自分が自分自身になりきれれる体験である。日常にこのような経験を重ねて生きていく人であれば、「権威主義的性格」のような歪んだ殻に閉じこもる必要はないだろう。

ヴァン・デン・ベルクの描くような、親しい者同士の会話の様子から、私たちが現実とみなしている世界の変容に着目することの重要性が見えてくる。そもそも、私たちが人生に「指図」しようとしたり、「期待と現実のギャップ」に苦しんだりするということは、私たちが現実そのものとみなしている私たちの「世界」の問題なのである。私たちが現実を耐えがたいと感じるときに、私たちが対しているのは、私たちの「世界」であるに過ぎない。同じ現実に関連して、他の人たちはまた別の「世界」に対しているのである。私たちの世界が絶望的な場合、変えるべきなのは現実そのものでなく、私たちのひとりよがりな「世界」なのである。

現代の生活の中で私たちが時に目眩を覚えるような絶望に見舞われるときに必要なのは「世界の変容」なのである。ナチスの収容所の現実が変わらないとしても、人生に指図する姿勢で受け止めるとすれば、「良いことが何も期待できない」現実

生きるという「世界」の作り方をしてしまうが、フランクルのように人生から問われていると感じるとしたら、この現実を耐え抜くということとその問いに答えようとすような「世界」の作り方となるであろう。遙かに恵まれた気楽な日常生活を享受している私たちには難しく感じられるとしても、実際にそのような「世界」の中で収容所を耐え抜いた人間がいるのである。私たちにしても、世の中によくある困難であれば、耐え抜くことに意味を見出すという姿勢の転換は十分にあり得る。個人差はあっても大抵の場合、風邪程度であれば、人生に指図しようとして「なぜ私だけこんな目に遭うのだ？」と絶望するよりは、辛くとも病気に耐えることに意味を見出す姿勢に転換できるだろう。小さな災難でも「なぜ私だけ？」とばかり受け止めてしまふ人は、主観的にはかなり困難な人生となるだろうし、絶望したり落ち込んだりしやすいだろう。

前述のように、信頼する親しい人間とのコミュニケーションが私たちにもたらしてくれるものは「共同で作り上げる世界」の体験であり、そこから私たちは現実を別様に解釈する柔軟性を獲得できるようになる。期待と現実とのギャップのような壁に突き当たらない場合は、特に現実の解釈を変えなければならぬことはないのかもしれない。しかし、乗り越えがたい（と自分には感じられる）壁を前にしたときには、そのことが非常に大切になる。自殺希少地域で他の人が強力に助けようとして

くれる場合、その人が様々に便宜を図ってくれることもさることながら、冷静な他者が現実に対処する手立てを考えてくれるということも大きいと思われる。私たちが日常生活や仕事上で壁に突き当たるときに、他人に協力してもらえたとありがたいのは、改めて冷静に現実に対処する姿勢を取り戻せるからである。自分ひとりで苦勞していた問題の解決の糸口は、自分とは別の角度から問題を分析することで見出されるものである。

こうして私たちは、他者との実りある、率直なコミュニケーションを図っていくようにするにはどうしたらいいかという問題に導かれていくことになる。現代人が他者との対話の機会を失い、孤独になってきている、と言いつけるかどうかは定かではない。しかし、「期待と現実とのギャップ」を生みだしやすい現代社会の環境に生きる人間にとって、以前の時代にもまして、他の人間との豊富な対話の機会を必要としているということとは間違いない。他者の解釈に導かれ、ヒントをもらいつつ、現実の柔軟な解釈の可能性に心を開いてこそ、私たちは自由を享受しつつ、長期の絶望に陥ることなく生きていくことができるし、不安に閉ざされることなく、安心して生きていくことができるようになる。

5 伝統社会からの手がかり

さて、「他者との対話」が問題だということは間違いないとしても、対話の内実が問題である。単なる情報交換や、定型化された役割演技まで「対話」に含めてしまうと、話が混乱してきてしまう。肝心なのは現実解釈の柔軟な変容である。深い変容を体験すること、ないしは比較的多様な機会に変容を多く体験することが、壁に突き当たった場合に、現実解釈の変容を図ることをしやすい人間をつくる、ととりあえず仮定してみよう。そうすると、他者の存在そのものというより、他者とともに共同で作る「世界」の変容ということに着目すべきであるということが分かってくる。

ヴァン・デン・ベルクの引用で見たように、信頼する親しい他者との対話は、他者と共同で作る「世界」に参入することを意味するということをもう一度考えてみたい。他者とともに語り合うこと、ないしは、他者とともにそこにいることによって現実の解釈が変わり、現実の相貌が変化するように感じられるような体験を、私たちは親しい人と語り合うたびに体験している。現代社会の中でそのような機会を増やしていくことを考える際に、何を手がかりにしたらいだろうか。

日常の中に現実の印象深い変容を体験するような機会というのは、なかなかすぐに思い浮かべられないかもしれない。せわ

しなく新しい情報に接する機会が多い社会ではあるが、その割には日常の生活世界そのものには変化が乏しいと感じられる面がある。家庭生活の文脈、仕事の文脈、学校の文脈など、それぞれの社会的文脈の中で、各個人の役割は比較的固定化されている。自らの役割が決まっている社会的文脈の自明性を喪失するような体験は、「非日常」のカテゴリーの中に分類されがちである。

そこで、しばらく伝統社会の例に沿って考察してみたい。伝統社会では、現代よりも現実の変容を日常的に演出しているように感じられるからである。そのような伝統社会の一面を考察することを通じて、現代社会の中に同様なものを探しやすくなるのではないかと思う。このように書くときに私が念頭に置いていることを以下に示してみる。

小倉美恵子は、著書『オオカミの護符』で、いまはもう都会化して、外部から流入した住民が圧倒的多数になってしまった川崎市の「土橋」という地区での伝統行事「御嶽講（みだけこう）」に、自らの両親の当番が巡ってきた機会に特別に参加させてもらった様子を描いている。

定刻近くになると次々に村の講中の人たちがやってきた。まず上座の祭壇に進み出て掛け軸「武蔵御嶽神社の「神さまの寄りまし」との解説が著者の母からなされていた」の

前に正座をし、線香を上げ、手を合わせて祈りを捧げる。幼馴染の両親や、村の行事でお世話になったおじさん、おばさん。懐かしい顔の人たちばかりだ。大学生になって以来、地元との関わりが薄くなっていった私は、ご近所ながらも顔を合わせることがなくなっていた。

祭壇に祈りを捧げ、皆が席に着くと、今回の「神さまの」「宿」の主人である父が進行役を務め、御嶽講が始まった。

最初に行われたのはクジ引きであった。実はこの御嶽講は、土橋から遠く離れた青梅の武蔵御嶽神社に参拝する代表者を選出するために行う。代表者は「代参」と呼ばれ、クジ引きはその代参を決めるためのものだ。父は事前に用意した阿弥陀クジを順番に講員に回していた¹²⁾。

集まってくるメンバーは皆顔なじみの近所の人たちなのであるが、その人たちの間で、改まった神聖な儀式が静かに行われ、ひとりずつ「正座して線香を上げ、手を合わせて祈りを捧げる」。そして、伝統の「代参」を決めるためのクジ引きを莊重に行っていくのである。儀式は、そこに日常とは異なる意味空間を生じさせるものである。このことは、伝統行事であっても、現代風な装いの卒業式のようなものであっても、基本的にそれは変わらない。

いつものお馴染みの人たちの間で行われるとしても、同じ人たちが同じままではなく、どこか違った人間に変貌していく。人間同士の関係も、厳かなものに変貌していく。卒業式であれば、卒業生と送り出す先生という厳粛な役割をそれぞれが自覚していくことになる。儀式を通じて現実の見え方が変容していくのを、私たちは目の当たりにするのである。儀式に神さまを請じ入れてもいなくても、このことに変わりはない。私たちは（日常の自明性の中でどのように目立たないままにされていたとしても）ひとつの次元だけの役割で社会に生きているわけではない。それは当然のことであるが、儀式は、それを改めて顕在化させる働きをするのである。

儀式張ったものを嫌って「なあなあ」で事を進めてしまうと、現実が一元化していくことになる。いつもの人間関係のままに現実の解釈が固定化されていくとも言える。服装を整え、一定の所作や発声をしたりすることによって、現実の別の次元が立ち上がってくるのである。現実の解釈を柔軟に変更する可能性を探っている私たちの現在の関心からすれば、儀式の存在は重要である。そのような儀式は、伝統行事である必然性はないかもしれない、伝統を引き継ぐにしても、時代とともに具体的な内容は異なってくることになるかもしれないが、ともかく儀式は現実の変貌を実地に体験する貴重な機会を提供するものである。小倉の記述の先を見よう。

今年の「宿主」である父と、次回の宿主が神の象徴である掛け軸の前に向き合って座る。二人は仲人から杯を受け、互いにお神酒を酌み交わす。人と神が見守る中で来年の宿が決まった。

このあと宿主である父の「乾杯」の発声に伴って「直会」が始まる。

直会とは、神と人が同座し、同じものを飲み、食べ、「直り会う」ことを目的とし、掛け軸を掲げたままで行われる。

直会の席では久々に顔を合わせた村人たちが互いの近況や、また先祖の思い出話に花を咲かせ、誰もが微笑を宿している。心なしか、掛け軸の「オイヌさま」も嬉しげに見える。

新しい住宅街の中にありながら、この空間だけは懐かしい雰囲気が漂っていた⁽¹³⁾。

客観的にいえば、要するに顔馴染みの近所の人たちが集まって、飲食をして懇談するだけのことであるわけであるが、これを「直会（なおらい）」ということにして神さまを参加させることによって、現実の解釈が変容し、意味が変わってくるようになる。つまり、「先祖の思い出話」が出てきてもおかしくないような意味空間が設定されることになる。何しろ、村の守り

神が同席しているという設定なのである。集まった人たちの「ご先祖様」も、生きていた頃は同じように直会をしていたのであるうし、現在は子孫を見守りつつ、守り神と同席していると観念されているのかもしれない。先祖の思い出や語り伝えというのは、普段でも人々の頭の中にあるのであろうが、特別な設定がなされないと、語りとして表明されることはまずないであらう。

6 「神々の居場所」はどこになったのか

ここまでの小倉の話の中で鍵になる役割を演じていた「神さま」についても考察してみよう。「神さま」の出番がめつきり少なくなってしまったことは、最近の日本社会にとっては、私たちの語りの機会の喪失と言えるだろう。自然崇拜と祖先崇拜を基本とする日本のアニミズム的な伝統は、世代から世代へと連綿と続く時間の感覚をもたらずものでもあった。しかしながら、人工的な環境の都市生活の中で地域のコミュニティの実質が失われてしまったために、自然も「ご先祖様」も私たちの生活の場から遠ざかってしまったのである。そうだとすれば、ごく一般的に言って、伝統そのままの「神さま」に簡単に私たちのもとに来てもらうわけにはいかないだろうと思われるのである。

ただし、このような「神さま」の捉え方は、アニミズムを一神教的な枠組みで捉え返すようなバイアスを常に伴っている。一神教に対して多神教と捉え、その多数の神さまのいずれか〔オイヌさま〕ないしは「ご先祖様」が一座の許に降臨していると言い切ってすまされるものではないのではないか。小倉は、地域の中で「神さま」が宿る場所には条件があるということを力説している。

「神々の居場所」を想うとき、記憶の彼方から「ペーラ山」という言葉が蘇ってきた。それは、多摩丘陵の村々で聞かれた「雑木山」を指す「地ことば」だ。…〔中略〕…

地元土橋では、ナラやクヌギなど薪にする木を「ペーラ」といい、それを生やした山を「ペーラ山」と呼んだ。煮炊きのための薪をとり、堆肥にする落ち葉を拾うのはもちろん、清らかな水を恵んでくれる命の山であった。そこには神々の棲む祠が祀られ、人々の祈る姿があった。

神々は、どこにでも祀られていたわけではない。土橋の百姓に経済的な恩恵をもたらした「竹藪」に神々を祀る祠はない。それでは、なぜ「ペーラ山」に祠が祀られてきたのだろう^{〔14〕}。

ここで小倉は、内山節が（内山の著書によれば関東地方の）

山村で暮らした際に、村では「稼ぎ」と「仕事」を区別していたという話を引く。「稼ぎ」は現金を稼ぐための労働で、条件次第では別のものにも乗り換えることも可能であるが、「仕事」は現金を稼ぐこととは別の営みとして、「世代を越えて暮らしたを永続的につないでいくためのもの」を意味しているという。そして、後者の「仕事」の場に神が祀られていると指摘する。ちなみに、土橋の「竹藪」は、土地の名産の筍を産出して、村に高収入をもたらしてきた存在であるが、重労働のため、現在では一軒の農家しか筍作りに携わっていないという。「ペーら山」の方は、土地の人は、むやみに木を伐って山の木を絶やしてしまわないように、細心の注意を払って維持してきた。

祖父は、ほぼ七年周期で「ペーら」を伐り出してきた。毎年伐り出す場所を替え、七年間置くことで初めに伐った場所にまた成木が育ち、永続的に恵みを得ることができる。人が自然に手を入れていてもいえるが、自然の回復力が人を助けているともいえる。互いの「はたらき」の結果として、あの心に沁み入る柔らかな谷戸の風景は、作り出されてきた。

土橋の「竹藪」は、換金作物を得るための「稼ぎ」の場であり、一方「ペーら山」は、永続的に暮らしを成り立たせるための「仕事」の場といえる。つまり、世代を越えて

守り続ける「仕事」の場に、神は祀られているのだ。

中でも、家事や子育ては最も大事な「仕事」であるから、各家には必ず神々の見守る場所があった⁽¹⁵⁾。

「竹藪」といえども、自然との共同作業で筍を得ていくことには違いない。しかし、あくまでも換金作物の生産であり、市場で売れるように様々に手をかけて育てていくものである。そして、売れなければ、あるいは売れ行きに見合う以上の労苦を伴うと感じられた場合には、放棄してしまっても構わない。愛着や情緒の薄い、乾いた、割り切った営みである。

小倉が引いている内山節であるが、このような事情について、少し別の角度から、以下のように記述しているのが興味深い。

この豊かな実りの秋は、作物を出荷しない、つまり作物を商品にしないことに大きく支えられているのである。

浜平の人々は、いまだでは農作物を出荷する家が一軒もなくなつた。もちろん耕地が狭くて、それほど収穫が多くなつたということもあるだろう。だがそれだけでもないのである。

出荷した瞬間に豊かな畑は貧しい畑に変わってしまう。今年も豊作だったインゲン豆を収穫しながら、これを出荷したらどんなふうだろうかとふと思つた。おそらく農協の

手数料や段ボール代などを引かれて、後日私のもとに数百円程度が振り込まれるだろう。まだ何度か収穫できるようにしても、三ヶ月をかけて育てた作物の代価としてはあまりにも少ない。いや金額の問題だけではない。村人に分けられ、各家庭の食卓を飾って、みんなで豊作を楽しむ豊かな暮らしが、出荷した瞬間に消え去って、三ヶ月の代価が貨幣としてのみ解答されてしまうのである⁽¹⁶⁾。

ちなみにこれなども、視点を移すことで現実の解釈が変容する一例とも捉えられる。経済的な問題として畑を見る場合と、作物を育てて収穫の喜びを分かち合う場として畑を見る場合とでは、風景として異なってくるだろう。どちらかが「正しい」ということではなく、私たちの視点が現実の解釈を変容させる分かりやすい一例ということがいえるだろう。あるいはまた、私たちが近所の農家の人たちと畑の収穫の話をするのか、農協の人たちと話をするのかによって現実の姿が違って見えるという言い方もできるだろう。つまり、私たちが、現実の対象について、どのような人たちと話をするかによって、現実が違って見えてくることを鮮やかに示す一例ともいえるのである。小倉の文章になぞらえて言えば、近所の人たちと収穫を分け合う場合は、「べーら山」に近づき、農協の人たちと収穫高の話をするとしたら「竹藪」に近づくことになる。

「神さま」と「神々の居場所」の話に戻ろう。再び小倉によれば、

かつては村ばかりでなく、町場の商家や職人、町人の家や仕事場にも「神々の居場所」が設けられていた。「仕事」とは人の力のみでは成就しないものだと考えられていたからだろう。

人が自然に身をゆだね、互いの力をうまく引き出し合うところに思いがけない「はたらき」が生まれてくる。これが仕事の本領なのだと思わせてくれる。「個性」とは、そこに匂い立つものに与えられるべき言葉ではないだろうか。

「稼ぎ」は人間関係の中でも成立するが、「仕事」は人のみではなし得ない。

こう考えると、現代の「仕事」の概念は、ずいぶんと変わってしまったことに気づく。むしろ「仕事」だと思っただけでいる労働のほとんどは「稼ぎ」と言えるかもしれない⁽¹⁷⁾。

この線で考えを進めていくことで、現代において「神さま」の関与が非常に弱くなってしまった事情について、ひとつの推測が可能になると思われる。現代では、ある特定の神さまたち

の影が薄くなったというよりは、「神々の居場所」がなくなってきたしまったのではないか。「神さま」の影が薄くなったのも、このことが原因ではないかと考えられるのである。つまりは現代社会における「しごと」の変容ということが絡んでいるのではないか。

「自然」に限定する必要はないと思うのだが、人知や人為を超えたものの関与によって、はじめて「しごと」が成功する、あるいは成就する、という感覚が減退しているのである。

改めて考えてみれば、間違いなく、近代以降の社会的な努力の方向は、人知や人為で可能になる範囲を拡大することであった。科学技術をはじめとする知に基づいて、人間の能力の範囲は大きく拡大したし、拡大しづけている。その結果確立された方法・手順に沿って作業を行っていけば、確実に成果が得られる。そういうことだけを「しごと」としてやっていけばいいのだ、というような観念が私たちの意識を支配してしまっているのである。そういう作業が「しごと」であるとするなら、あまり他の人と積極的に語り合うことでもないのではないだろうか。方法、手順、マニュアルさえあり、それに則って働くようにすれば、少なくとも私たちの「しごと」が他人から非難される謂われはない……としたら、現実変容につながる会話は減退していくことになるだろう。

しかし、本当のところ、多くの人たちが心の底では知る通り、

方法、手順、マニュアルさえあればいいということにはならない。一生懸命に取り組んだ末に、「運を天に任せる」ような瞬間が必ず訪れるということは、実は「しごと」の経験を積んだ人であれば、誰もが知っている。スポーツ選手のような勝負事は分かりやすい例であろう。きちんと合理的な方法で地道に練習すればそれで済むということにはならない。そして全てのビジネスにおいて競争や勝負が避けられないとすれば、スポーツと同様なことが言えるはずである。自分たちの側の努力と、他の人の側の努力がぶつかるところで、どのようなことが起こるか、事前には誰にも真に分かったりはしない。あるいはまた、家庭での子育てのような「しごと」についても、競争とはまったく違うが、マニュアル通りにはできないという点では同じことが言えるだろう。

つまりは、現代においても、「しごと」に真剣に打ち込む人、「しごと」の無事な成就を心底願う人は、たいていはどこかで人知を超えた力に出会うということにははしまいか。「神さま」は、その近辺に移動したのだ。スポーツやビジネスの成功者の話を人が聞いたがるのは、このような事情が関係していると思われる。人間関係や、人を育てる過程で成功を収めた人の話も同様である。

問題は、誰もが「しごと」に打ち込むとは限らないということではないだろうか。豊かな社会が実現し、職業の選択肢が増

えるほど、何に打ち込んだらいいのかわからなくなる人は増加するに違いない。職業に目を奪われすぎて、子育てや家事に目が向かない人も出てくるだろう。あるいは、人生の初期の段階で学校教育の制度の中に投げ込まれ、人間の社会生活における「しごと」というものの位置づけを見失う危険性に晒されていることも、「しごと」に打ち込めない個人を大量に生みだしているに違いない。人間が自分の能力を十全に使う機会を見失い、精神的な意味で放浪を始めるとしたら、「神々の居場所」にはなかなかたどり着けないだろう。現代社会の大きな課題のひとつは、失業問題の先にある。「稼ぎ」があればそれでいいということにはならない。

土橋の村の「御嶽講」のような、かつては誰もが参加できたと考えられる、現実の変容を体験するコミュニケーションが、現代社会で見失われがちな理由は以上のようなことではないかと考えられるのである。

少し前までは村でも町でも、大事なことを決めるとき、必ず神の前に集まった。「オオカミの護符」がもたらされる「御嶽講」や「谷ツ平講」にも、神の前に人が集い、そのつながりを深めていく姿があった。

人の力だけではなく、また自然の力だけでもない。その双方をつなぐ「はたらき」が宿る「仕事」に出会えたとき、

人は感動を覚え、信頼を感じ、そこに人と人とのつながりが生まれるのではないだろうか⁽¹⁸⁾。

農家では農業をする以外に道がないという社会の仕組みは、現代社会からみればシンプルであり、かつ融通が利かない社会であり、貧しさともあいまって個人の自由や個性が抑圧されたとも見なされよう。しかし、農業をするしかないからこそ、農業に打ち込み、農業の営みの中に、そしてそこに組み込まれた家庭生活の中に「神々の居場所」を皆が見出すことが可能になっていたのである。そこで多くの人は他の人たちの語り合っている中で、現実の変容を様々な感じながら、柔軟な姿勢で現実を捉えたり捉え返したりしながら日常生活を送っていたのに違いない。その知恵を現代に生かしていかななくてはならない。

7 人生の節目を共有できるか

小倉の描く農村や山村の社会の営みで、本稿のテーマに深く関連する点はまだある。人が他の人に抱く関心と配慮の深さである。関心も配慮もなければ、人と人とのコミュニケーションと言つても空しいだけである。それだけではない。「大人になる」感覚に代表されるように、人が人生のステップのあらゆる段階で体験することは、ステップを経ることによって現実解釈

の変容を体験するということなのである。そこに対する関心を持つこと、そしてそれを見守ることで、当事者とともに現実の変容についての感覚を研ぎ澄ましていくことができるはずである。小倉の友人が関わっている「民族文化映像研究所（民映研）」が秩父の伝統的な人生儀礼の記録『秩父の通過儀礼』シリーズを作ったことに関して、小倉は次のように述べる。

これは昭和五〇年代前半に秩父の村々で行われていた伝統的な人生儀礼の数々を記録したもので、「安産祈願から帯解きまで」「子どもザサラから水祝儀まで」「若衆組と籠勢」「クレ祝儀・モライ祝儀」「年祝いから先祖供養まで」の全五巻からなる。

誕生から少年期、成人、結婚、長寿の祝い、葬式に至る「人の一生」に対し、その成長を見極め、丹念に祈り、寿ぎ、そして見送る人々の姿が鮮やかに映し出されている。シリーズを見終わったとき、「人は、人をこんなにも大切に扱ってきたのだ」という思いで心が震えた⁽¹⁹⁾。

理由のあることでもあるが、現代社会では、儀礼も失われつつあるだけでなく、儀礼とともに他人の人生に対する関心や配慮も影が薄くなってきているのではないか。

現代社会の複雑さは、特に身体の成長期以降に関して、定型

的な通過儀礼を設けにくいような事態を招いている。「成人」としての扱いを受けることひとつとっても、境界線は（選挙権や刑事罰の問題などにすら見られるように）非常に曖昧である。結婚しない男女の増加が話題になって久しいし、何歳から老人と扱うべきなのか、何歳になったら長寿と言えるのか、誰をも納得させる線を私たちはもう引けない。とはいえ、それは集団としての線引きの話であって、個人個人の人生においては、人生の各段階というものは存在する。昨日までとはまったく現実が異なって見えるような体験すら、決して珍しいものではない。会社勤務の人間がまったく別の部署に異動になったり、昇進したりすれば、それだけで日常風景が変わるだろう。宴会の幹事をするとようなことによっても風景は変わる。結婚や子ども誕生については言うまでもないし、年配になってから、電車で席を譲られた体験をするというようなことでも、当人の現実の見方に大きな影響を与える可能性がある。

ある種の境界線を越えるような、そのような体験を、秘かな個人の体験として終わらせずに、他の人がともに「見極め、祈り、寿ぎ、見送る」ということはできないものだろうか。ひとつ言えることは、当事者自身が気づかなければ、誰にも分らないほどひっそりとそれが起こることが非常に多いということである。結婚式や葬式がなくなるという未来は考えにくい。つまり誰にでも分かりやすい出来事なのであるが、電車で席を譲

られたような出来事はどうか。あるいは上司に誉められて自信が出て来たような場合はどうか。人生のステージが変わる経験は、現代社会においては、伝統社会と比較にならないほどたくさん段階があるだけでなく、それらが人目につきにくいのである。

少なくとも言えることは、私たちは、これらの無数の人生の節目について、自覚を深めるとともに、他の人の人生の節目が当人にとっては少なからぬ意味を持つことを認識することが重要であるということである。家族や友人や、職場の親しい同僚といった人間関係の親しさとは別に、私たちが時に話し合ってみてよいと思われるのは、このような人生の節目の体験についての話題である。他人の話聞いて、同じような経験をしていれば、そのことについて話してみるのもいいだろう。小倉の文章からもうかがえるように、人が人として大切に扱われているかどうかは、人生の節目の持つ意味を理解し、尊重してもらえらるかどうかということにかなり依存しているのではないだろうか。

同時に、そのような語り合いは、現実解釈の不思議な変容についての私たちの理解を深めてくれるものになるだろう。それだけ私たちの現実の見方が柔軟になっていき、危機の際に特定の解釈に固執することが少なくなっていくことが期待できると考えられるのである。

8 結び

自由を巡る考察は、コミュニケーションの重要性についての問題に繋がり、また、コミュニケーションが現実解釈の変容に対する感覚を育む可能性について考えることに繋がっていった。伝統社会に豊かに存在していたと考えられる現実解釈変容に関わる儀式や儀礼などについて考えてみることで、現代社会に潜在しながら十分に追求されてこなかった可能性についても洞察が得られることが示せたのではないかと思う。

自由が重荷になってしまおうとしたら、自由な選択の結果遭遇するような「期待と現実とのギャップ」や思いがけぬ壁の出現などの危機に対処する術が分からないというところに、それは起因すると思われる。現実の解釈を柔軟に変容させることに成功する人間だけが、現代社会の自由を享受できるといっても過言ではないだろう。

特に、現実や社会を見る目が、科学技術的な視点や経済的な視点に固着してしまわないということが重要であろう。鍵となり救いとなるのは、私たちひとりひとりがそれぞれ独自の「世界」を生きているということなのである。それらに触れ、それらを理解しようと努めることによって、いわば私たちの存在が解きほぐれていくきっかけがつかめるのである。自分以外の私たちのそれぞれユニークな独自の「世界」を、科学的な概念や

経済的な考慮によって均してしまったり、抽象的なカテゴリーに押し込めてしまったりすれば、私たちは結局のところ、個人的な狭い「世界」の中に閉じこめられ、私たち自身の特定な現実の解釈の囚人となってしまいうほかはない。それでは環境や状況の突然の変化に対応できないまま、自由の重荷にいずれは押しつぶされてしまうことになってしまいうだろう。

私たちのもっと必要なことは、いかにして現実の解釈の変容を豊富に体験していくかということであり、ひとつの鍵は「しごと」である。かつては「神さま」と共同で行っていく感覚があったものが、現代で失われてしまったとすれば、「しごと」の意味の混乱のためであろう。「しごと」に身を入れるということができないまま、「稼ぎ」の感覚でやっていこうとする限り、伝統社会の豊かな精神的水準に達することはできない。人知や人為を超えたところで「しごと」が成就するという感覚を取り戻すことが、他者との意義深い対話に繋がっていくだろう。あるいはまた、それは人間と（人間の力を遥かに超える）自然との豊かな関係を取り戻す基盤となっていくかもしれない。

現代でもすれば見失われがちな、人生の節目についても、私たちはもっと敏感になる方がよいだろう。自分の人生の節目を他者と共有すること、他者の人生の節目を自分も共有したり応援したりすることを通じて、私たちは人生についての生き生きとした感覚を取り戻すことができるだろう。個人はコミュニ

ティーの支えがあつてはじめて強くなれるということの意味は、もしかしたらそのあたりにあるのではないだろうか。

注

(1) 近年よく読まれている「自己啓発」本である『嫌われる勇氣』の主題でもある。

岸見一郎、古賀史健『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』ダイヤモンド社2013年参照。

(2) 「強く、構造化する本当の信念は、すべて、個人的であると同時に共同的である。それは、一人一人の信仰と社会的絆への信頼に帰着する宗教の言葉が強調するところでもある。人類史に豊富に見られることは、個人は、共同体が強いつきにだけ、強くなることである。歴史上の偉人は、例外的で模範的と描かれ、かつ考えられている人物であるが、彼らには、常に、統一のとれた共同体の支えがあつた」。

エマニュエル・トッド『経済幻想』藤原書店1999年 363ページ

ジ参照。

(3) 「一人だけで、孤独に負けてしまうと、個人は、何か目的に到達する必要性を実際には信じていることができなくなってしまう。だから、共同的信念が衰退すると、「その社会は」冷酷に個人の没落に向かうのである。こうした雰囲気では、道に

迷い、徒党を組み、物まねをし、実際の力より評判だけを求めたがる指導者が出てきうる。かれらは、共同して動くことも、個人的見解を表明することもできない。哲学理論も社会学理論も、このような脆さを予見できなかった」。(「内は私が補ったもの。)

エマニユエル・トッド 前掲書 364ページ参照。

(4) 「19世紀のヨーロッパのように」大多数の男女が文字を知っている社会、あるいは識字普及が続き近い将来すべての人がこの教育段階に達すると思われる社会では、民主主義の理念の発展が普通であり、自然である。「その段階の社会では」後期教育課程、すなわち中等・高等教育に達した人は、経済的に特権のある人々をも含めて、まだ人口のわずかな部分を占めるにすぎない。識字普及は、その最終段階で集団の均質化という特権に似た時期を迎える。それは、周辺の言語や方言を切り捨てながら、コミュニケーション様式の標準化をとともなう。政治的には、それは、同じ言語を話し、読み、書く人々、それゆえ討議し、論証し、決定し、投票する人々の広くかつ真正の共同体をつくる。この共同体がその内部構造をみることができるなら、それは自らを民主制と考えるだろう。外部をみるなら、自らを国民と考えるだろう。

民主制と国民は、それゆえ、大衆の識字により均質化された社会の内部と外部の二つの顔であるにすぎない。それゆえ、

この二つの概念は、19世紀の人間にとってきわめて親近性の強いものであったのである。民主主義を肯定的に国民を否定的に評価することによって、この二つを切り離そうとする今の考えは、19世紀の人には論理的に不可能なものにみえるだろう。

エマニユエル・トッド 前掲書 160ページ参照。

(5) 森鷗外『鼎軒先生』

(6) 「近代の社会生活の有する再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見いだすことができる」。

アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』(而立書房)1993年 55ページ参照。

(7) 「われわれは、おそらく今日、20世紀末に至って初めて、こうした見地がいかに人びとを心底不安にさせる見解であるかを、本当の意味で理解しはじめている。理性の主張は、それが伝統という主張にとって代わった際、かつて既存のドグマがもたらした以上の確信性を人びとに一見実感させていった。しかし、こうした考え方は、モダニティの示す再帰性が現実には理性を打破していくことにわれわれが気づかない限り、つまり、少なくとも理性を確信できる知の獲得と解釈していく限り、表面的に説得力をもつだけに過ぎない。…(中略)

：われわれが方向感覚を失って生きる世界は、再帰的に適用された知識によって徹底的に形成されているが、同時にこうした知識の構成要素がいずれも修正を受けないとは決して断言できない世界である」。

アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』（而立書房）1993年 56－57ページ参照。

(8) ヴィクトール・フランクル『夜と霧』みすず書房1985年182－185ページ参照。

(9) 森川すいめい『その島のひとたちは、ひとの話をきかない 精神科医、「自殺希少地域」に行く』青土社2016年98ページより

(10) J. H. ヴァン・デン・ベルク『人間ひとりひとり』現代社1976年 96－97ページ参照。

(11) J. H. ヴァン・デン・ベルク 前掲書 97－98ページ参照。

(12) 小倉美恵子『オオカミの護符』新潮社2014年 50ページ参照。

(13) 小倉美恵子 前掲書 53ページ参照。

(14) 小倉美恵子 前掲書 215－216ページ参照。

(15) 小倉美恵子 前掲書 217－218ページ参照。

(16) 内山節『時間についての十二章』岩波書店1993年 57－58ページ参照。

(17) 小倉美恵子 前掲書 218－219ページ参照。

(18) 小倉美恵子 前掲書 219ページ参照。

(19) 小倉美恵子 前掲書 130－131ページ参照。